

い。また、虐待を受けている高齢者のうち、約7割が要介護認定を受けており、認知症である者（要介護認定者における認知症日常生活自立度「Ⅱ以上」の者）が、被虐待高齢者全体の69.3%を占めた。また、虐待の加害者は、「息子」が40.7%と最も多く、次いで、「夫」17.5%、「娘」16.5%となっている（図1-2-6-10）。

#### (4) 高齢者による犯罪

高齢者の刑法犯の検挙人員は、平成23（2011）年は48,621人と前年に比べほぼ横ばいであったものの、13（2001）年と比較すると、検挙人員では約2.4倍、犯罪者率では約2倍となっている。また、23年における高齢者の刑法犯検挙人員の包括罪種別構成比をみると、窃盗犯が72.9%と7割を超えている（図1-2-6-11）。

#### (5) 高齢者の日常生活

##### ア 生きがいを感じている人は約8割

60歳以上の高齢者が生きがいをどの程度感

じているかについて見てみると、「十分に感じている」人と「多少感じている」人の合計は約8割に達している。男女別にみると、女性（83.2%）に比べて男性（79.8%）が低くなっている（図1-2-6-12）。

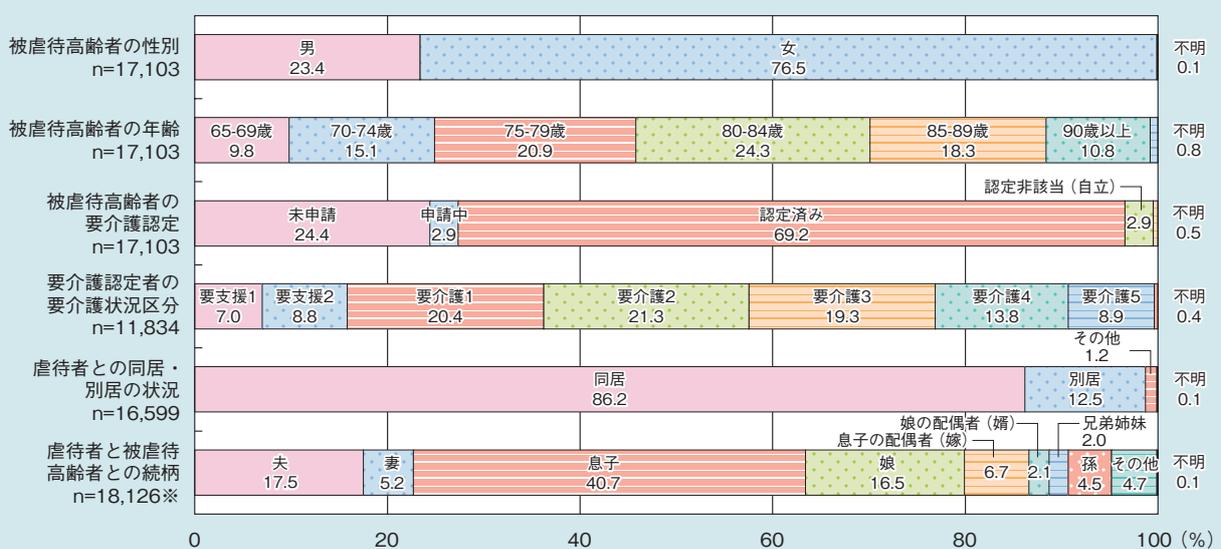
##### イ 今後、毎日の生活を充実させて楽しむことに力を入れたい人が増加

内閣府「国民生活に関する世論調査」（平成24（2012）年）によると、今後の生活で「貯蓄や投資など将来に備える」ことよりも「毎日の生活を充実させて楽しむ」ことに力を入れたい人の割合は、60～69歳は79.7%、70歳以上は82.4%であり、50～59歳では約6割、49歳以下の各層では4割前後であるのに対して、60歳以上の各層の割合は非常に高い（図1-2-6-13）。

##### ウ 一人暮らしの男性に、人との交流が少ない人や頼れる人がいない人が多い

60歳以上の高齢者の会話の頻度（電話やE

図1-2-6-10 養護者による虐待を受けている高齢者の属性



資料：厚生労働省「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果」（平成23年度）  
 ※1件の事例に対し虐待者が複数の場合があるため、虐待判断事例件数と虐待人数は異なる。

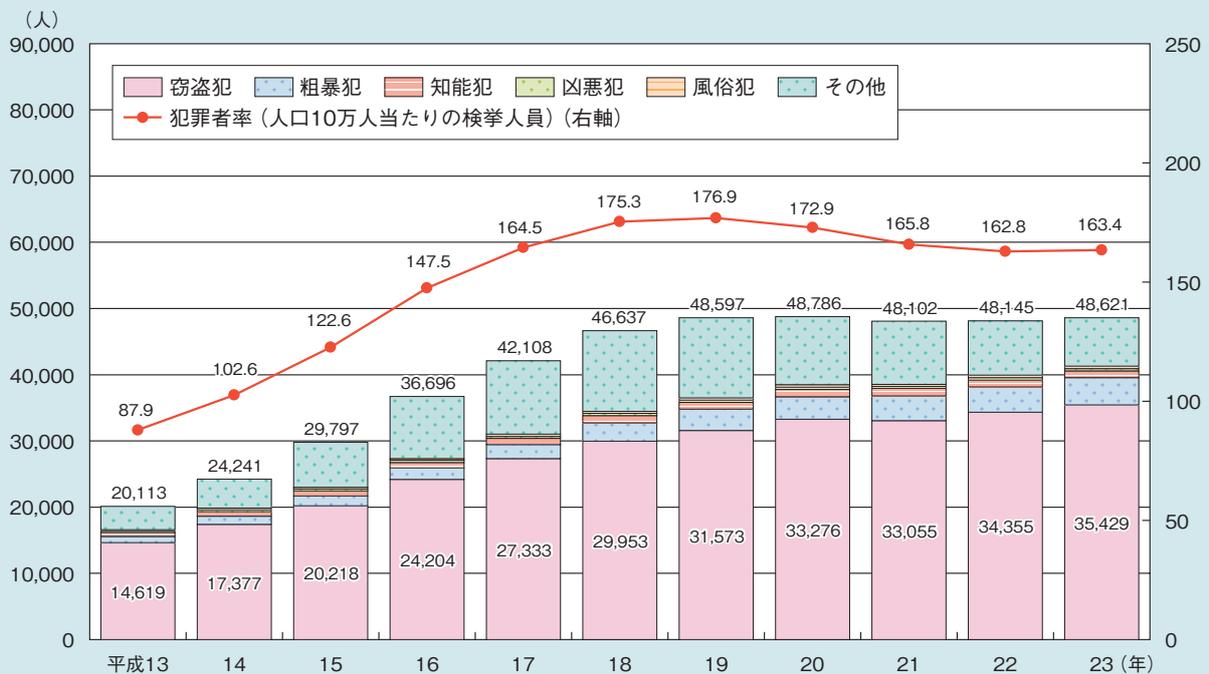
メールを含む) をみてみると、全体では毎日会話をしている者が9割を超えるものの、一人暮らし世帯については、「2～3日に1回」以下の者も多く、男性の単身世帯で28.8%、女性の単身世帯で22.0%を占める(図1-2-6-14)。

近所づきあいの程度は、全体では「親しくつきあっている」が51.0%で最も多く、「あいさつをする程度」は43.9%、「つきあいがほとん

どない」は5.1%となっている。性・世帯構成別に見ると、一人暮らしの男性は「つきあいがほとんどない」が17.4%と高く、逆に一人暮らしの女性は「親しくつきあっている」が60.9%と最も高くなっている(図1-2-6-15)。

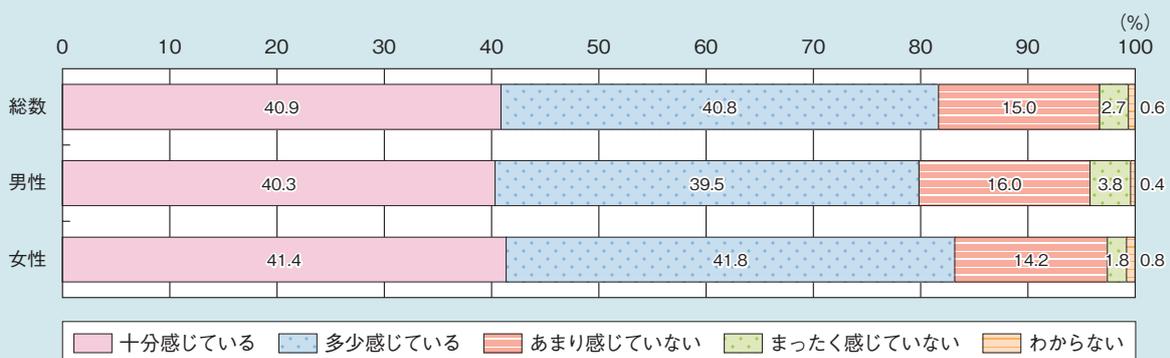
また、病気のとときや、一人ではできない日常生活に必要な作業(電球の交換や庭の手入れなど)の手伝いについて、「頼れる人がいない」

図1-2-6-11 高齢者による犯罪(高齢者の包括罪種別刑法犯検挙人員と犯罪者率)



資料：警察庁「平成23年の犯罪情勢」

図1-2-6-12 生きがいの程度



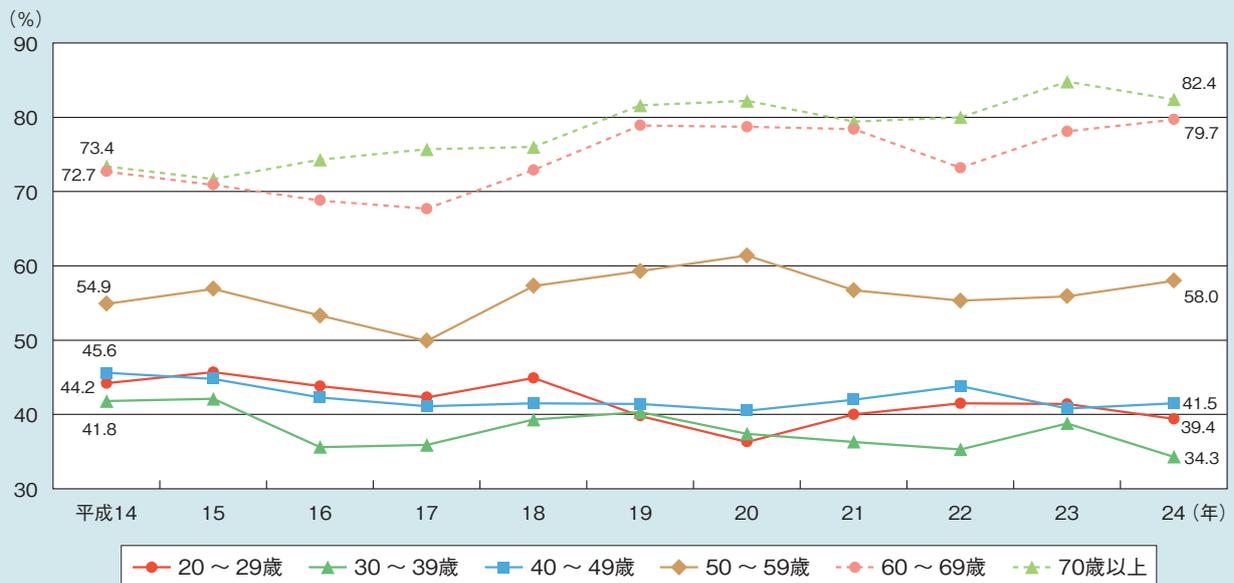
資料：内閣府「高齢者の健康に関する意識調査」(平成24年)  
(注)対象は、全国60歳以上の男女

者の割合は、全体では2.4%であるが、一人暮らしの男性では20.0%にのぼる（図1-2-6-16）。

### エ 孤立死と考えられる事例が多数発生している

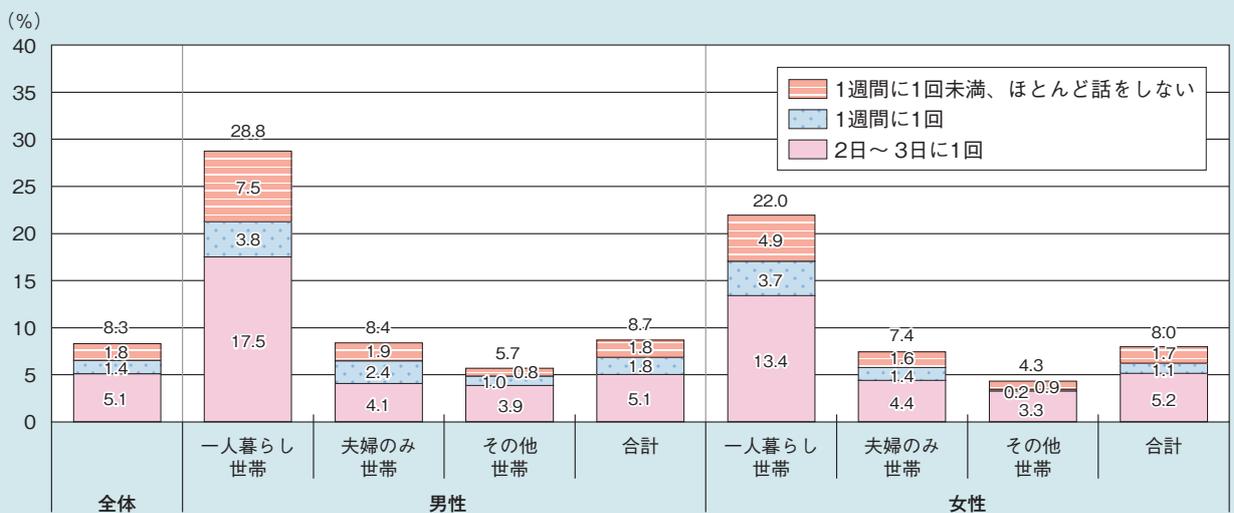
誰にも看取られることなく息を引き取り、その後、相当期間放置されるような「孤立死（孤独死）」の事例が報道されているが、死因不明の急性死や事故で亡くなった人の検案、解剖を

図1-2-6-13 生活を充実させて楽しむことを重視する人の割合



資料：内閣府「国民生活に関する世論調査」

図1-2-6-14 会話の頻度（電話やEメールを含む）



資料：内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」（平成23年）

（注1）対象は60歳以上の男女

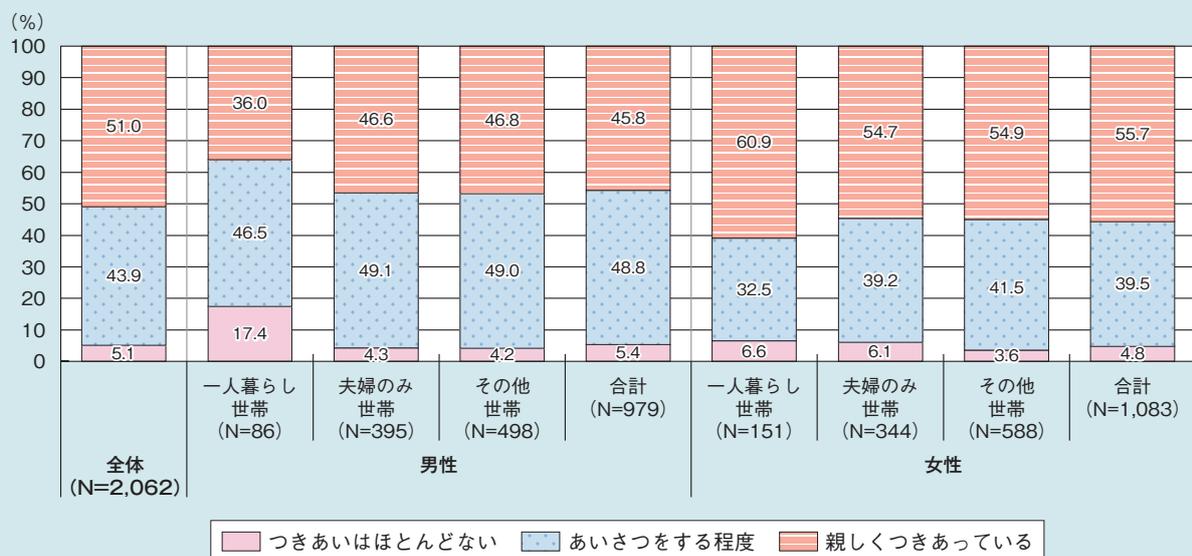
（注2）上記以外の回答は「毎日」または「わからない」

行っている東京都監察医務院が公表しているデータによると、東京23区内における一人暮らしで65歳以上の人の自宅での死亡者数は、平成24（2012）年に2,729人となっている（図1-2-6-17）。

また、（独）都市再生機構が運営管理する賃貸住宅約76万戸において、単身の居住者で死

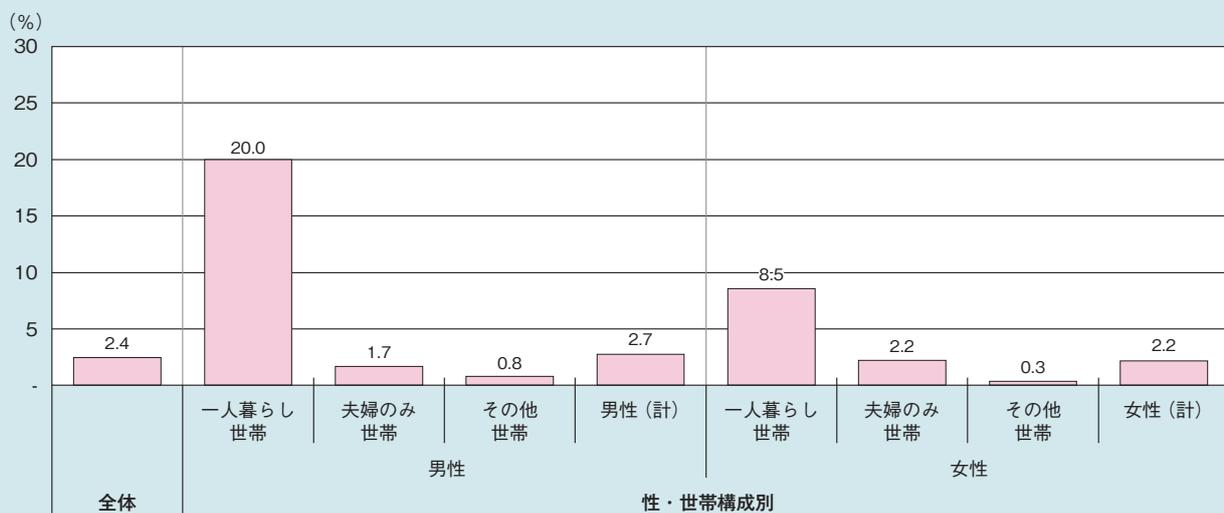
亡から相当期間経過後（1週間を超えて）に発見された件数（自殺や他殺などを除く）は、平成23（2011）年度に200件、65歳以上に限ると131件となり、20（2008）年度に比べ全体で約3割、65歳以上では約5割の増加となっている（図1-2-6-18）。

図1-2-6-15 近所づきあいの程度



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」（平成22年）  
（注）対象は60歳以上の男女

図1-2-6-16 困ったときに頼れる人がいない人の割合



資料：内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」（平成23年）  
（注）対象は60歳以上の男女

オ 孤立死（孤独死）を身近な問題と感じる人は4割を超える

誰にも看取られることなく、亡くなったあとに発見されるような孤立死（孤独死）を身近な

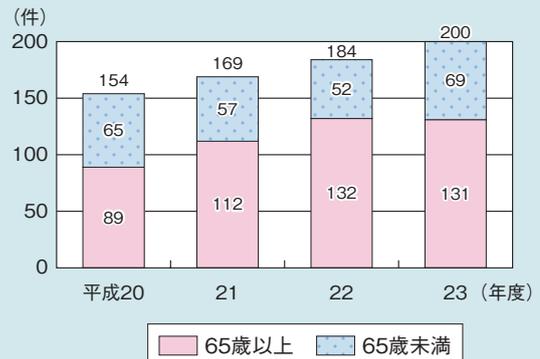
問題だと感じる（「とても感じる」と「まあ感じる」の合計）人の割合は、60歳以上の高齢者では2割に満たなかったが、単身世帯では4割を超えている（図1-2-6-19）。

図1-2-6-17 東京23区内で自宅で死亡した65歳以上一人暮らしの者



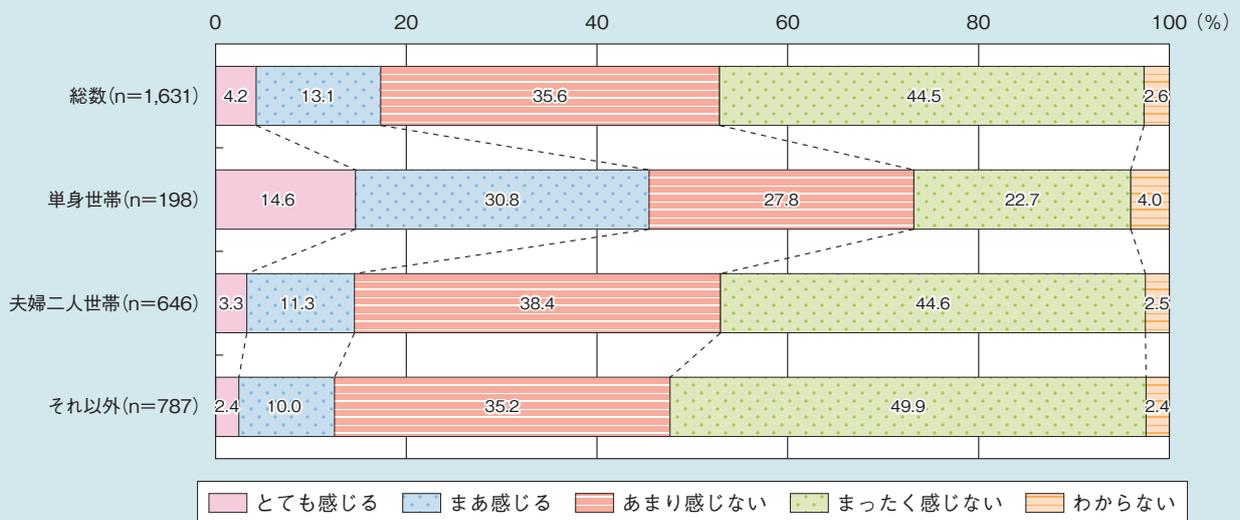
資料：東京都福祉保健局東京都監察医務院「東京都23区内における一人暮らしの者の死亡者数の推移」  
 (注) 平成24年は速報値

図1-2-6-18 単身居住者で死亡から相当期間経過後に発見された件数



※(独) 都市再生機構が運営管理する賃貸住宅で、「団地内で発生した死亡事故のうち、病死又は変死の一態様で、死亡時に単身居住している賃借人が、誰にも看取られることなく賃貸住宅内で死亡し、かつ相当期間（1週間を超えて）発見されなかった事故（ただし、家族た知人等による見守りが日常的になされていたことが明らかな場合、自殺の場合及び他殺の場合は除く。）」を集計したものの。

図1-2-6-19 孤独死\*を身近な問題と感じるものの割合



資料：内閣府「高齢者の健康に関する意識調査」（平成24年）  
 (注) 対象は、全国60歳以上の男女  
 \*本調査における「孤独死」の定義は「誰にも看取られることなく亡くなったあとに発見される死」